

●春日部市民文化講座（第 17 回） 「利休の侘茶の継承者、高山右近の茶の湯」

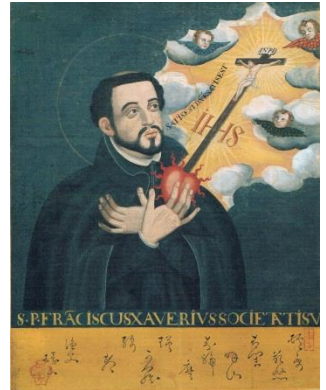
◆日時：2015 年 10 月 7 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■南坊・高山右近

今日は高山右近という人の茶の湯を少しマニアックに話してみたいと思っています。この軸はいつも持って来ているのですが、旧暦 9 月 10 日（太陽暦 10 月 10 日頃）に高山右近が細川忠興に送った「日本訣別最後の手紙」です。そして、ちょうど 1 か月後の旧暦 10 月 6 日から 7 日、太陽暦では 11 月 6 日頃に長崎からマニラに追放されるのです。徳川家康から宣教師と同様に国外退去、追放されるのです。でも彼にとって、それは本望だったと思います。それは、彼が追放された頃に好んでいた名前が「南坊」と言います。南蛮の坊さんですから宣教師のような生活を送りたいと言っていたのです。彼は、加賀・前田家の客将になってからは総て捨ててこそその世界に自らの人生の軸を移していったように思います。だから彼は何にも遺していません。茶の湯をしていた武将というのは、いろいろな物を遺しているのですけれども、高山右近は本当に何も遺していないのです。そんな中で、僕は 40 年間ずうっと探し続けてきたことを皆様にご披露したいと思います。

■僕の研究テーマ

これは皆さんが教科書でご覧になったことのある「聖フランシスコ・ザビエル」の肖像画です。この絵がどこで描かれたかという日本です。下に書いてある文字は万葉仮名です。これは、徳川時代から最近まで、秘密の小箱の中に隠されていたのです。それが最近になって出て来たのです。ですから、ザビエルが来た頃に会った日本人が書いて、その後、禁制になって仕舞われて、最近明らかになったものです。これを日本人が描いたって考えられないでしょう。これは、大阪の茨木の旧家から発掘されたものです。次に大阪の南蛮文化館にある安土城の「天主閣址」の石碑で、天主閣があったことのサインですね。次が利休さんが持っていたとされる「山姥文庫」と呼ばれるものです。こういう中に、利休さんの侘びの世界というものが構築されているのではないかということが、これまでの僕の研究テーマでした。



■高札で掲げられた禁教令

今日、皆さんに見ていただきたいのは“高札”です。これは、花積の丘の上会堂を造るビジョンを持ったときに、影響を与えられた一つです。どういう布告かというと、徳川時代になって「キリシタンは禁教である。宣教師もいてはいけない。もし宣教師を見つけて訴えたならば、幕府は銀 500 枚。」銀 500

枚というと 41 年間くらい働かなくても人間が一人食べていくことのできる金額です。これは家光の時代に出されました。長崎の奉行所は先駆けて規範をつくっていました。これは太政官、明治政府になってからも出されていました。

■丘の上会堂を造った動機

僕が丘の上会堂を造るときに、何故これが後押し・動機付けになったかという、この春日部のまちでイエス様のことを伝えても、何でみんなは反応してくれないのだろうかと思ったことです。それは、こういう“高札”があって、先祖代々我が家はキリスト教とは関係ないという教育がされていたのですよ。邪宗門ですからね。食わず嫌いというのか、それが文化になってしまっていたのです。だから、江戸幕府の時代にキリスト教を恐れまっぴら御免、うちには関係ない。僕が布教でお宅に伺い「キリスト教で来ました」と言うと、「うちは間に合っています」と言われますよね。たぶん皆さんもそうだろうと思うのですけれども。だから教育がいかに大切だということです。政府がどういう掟を作り、どういう方向に行くかということも凄く大事なテーマだと思います。なぜ日本人は、聖書の話、キリスト教の話、そして教会に対して距離を置いているのか、これが真剣な僕のテーマなのです。人口の 1%もキリスト者がいない国というのは、この日本列島くらいでとてもユニークです。イランやイラクだって、ベトナムだってもっと多くのクリスチャンがいるのに、なぜ日本では 1%未満なのかです。ところが高山右近の時代は、はるかに 1%を超えていたのです。そして、大名や武将というリーダーたちが率先して洗礼を受けていたのです。丘の上教会の玄関に“高札”を掲げ、一番低い場所に茶室を設けたかというのは、僕の思想的葛藤の中で生まれているのです。

■茶の湯は禅宗・仏教の美意識ではない！

茶の湯というのは、キリスト教とは関係ない禅宗の哲学が作った文化であって、キリスト教とは全く無縁のものであるって僕は教えられてきたのです。それは、キリスト教を良く知らない人がそういうことを教えていたのです。ぼくは牧師ですから、それは違うよねって言いたいので、そもそも利休さんが“侘び茶”を創るところまでずうっと遡り迫っていった訳です。その中で気付いたのは、利休さんは「山姥文庫」に描かれたエデンの園の物語を知っていたということです。しかも利休さんが死んでから 400 年間、表千家の宗匠が持ちながらも世に発表してこなかった。それは邪教

だったからです。もしも、家光以降の時代に千家がそんなものを持っていると分かったら、明らかにお家断絶ですから、燃やさないで捨てないで、ずうっと代々の家元が持っていたのです。それから、僕が入門した頃は即中齋家元でしたが、この方は家が火事になった時に“灰”を持って逃げるとおっしゃっているのです。最初は何て変なことを言っているのだろうかと思ったのですが、今の而妙齋家元が僕たちに言ったのです。「私たちは利休さんの使った灰を今も使っているのです。継ぎ足して、継ぎ足して」とね。茶の湯では見えないところで非常に心を込めてもてなすのですが、灰からがもてなしになるのですよ。これはちょっとマニアック過ぎるかも知れませんが、茶室を造られた方は分かるでしょう、この気持ち。灰というのは凄く大切な物なのですね、なぜ大切かというところを三千家は語っていませんが、武者小路千家の今の家元が僕たちの前で「牧師さんがいるから言う訳ではないですけども、キリスト教なくしては利休の侘びは存在しないと私は確信しています」とおっしゃっていました。

■高山右近の侘び茶

僕がイエス様以外に理想とするクリスチャンは誰だろうかと考えていた時に、高山右近に出会ったのです。そして彼が愛した茶の湯を研究してきました。さて、利休さんのお弟子で山上宗二という人がいました。この人の書いた「山上宗二記」によると、宗二は仏教、禅宗の茶の湯を明らかに構築していたということが分かります。私の知り合いの明治大学名誉教授・渡辺誠一さんという方がいらっしゃいます。「山上宗二の世界」も書かれています、その方が僕に送ってくださった中に、高山右近が所持していた茶入のことが書かれています。高山右近が「侘助肩衝」という茶入を所持していたという資料です。それが関東大震災の時に壊れてしまい失われてしまったのですが、大正時代に綴られた名物に関する資料に「高山左近所持」と書かれて掲載されており、現在は徳川本家の所持と言われています。



■茶の湯の中に見えるキリスト教との繋がり

西山松之助先生が手書きで写した茶杓なんですが、利休型と言われる茶杓はみんなクルスの形をしているのです。竹の樋が節を貫いているのです。この節と樋によって十文字を刻んでいるというのは、驚きの仮説でした。高山右近が遺した茶杓「御坊へ」というのがあります。西山先生がおっしゃるには、「御坊というのは宣教師のことだろう。宣教師のために削った茶杓を根曲がり

の竹筒に入れて贈ったのであろう」と。そして「花十」と書いてあり、それを西山先生は「僕は“ハナクルス”って読んだんだよ」って、僕は「へえ〜」って。その言葉で西山先生にすっかりと心を奪われてしまいました。この高山右近の茶杓は、兵庫の美術館にただ一つだけ遺っているのです。この一つだけが遺っているのも謎です。右近が前田利家の客将になっていた時に自分の茶室に置いていたと言われる灯籠があります。キリシタン灯籠と呼ばれますが、それは明治以降になって誰かが呼んだので、元々は織部灯籠です。そういう言い伝えのある灯籠が金澤の立像寺(りゅうざうじ)にあります。高槻城にある高山右近の墓からは、十字の付いた信仰を託す品がたくさん出て来ています。彼は、灰をいじっていましたから、土に還るといふ信仰を持ちながら、天国に蘇る、再び新しい命に生まれ変わるんだという人生観を持って日本を追放されました。だから、40 日後にマニラで死んだのですが、彼は悲しいではないのです。「自分の死は分かっているのだけれども、周りの人たちが悲しむから言わないんだ」ということをモレホン神父に語っています。皆さんに考えていただきたいのは、自分はなぜ生まれて来て、なぜ生きていて、死んだあと何処に行くのかということをも真面目に考えて欲しいなあと思います。千利休という人は、真面目に自分の侘び茶の中に秘めた。そして、高山右近はその良き理解者であったというふうに僕は思うのです。

■高山右近の茶の湯は禅宗でなかった

禅宗という美意識は、「不均斉」「簡素」など七つだと言われます。この七つが禅宗の悟りの極意だ、美意識だとある学者が言ったのですが、それに対して、イエス様の教えだってこれはあるよというのが僕の考えであり、高山右近は総てをマスターしていたのですよ、というのが本日の結論なのです。キリスト教が邪教とされた時代に、千利休の茶の湯は何だったのか、高山右近が立派に千利休の弟子として生涯を全うして茶人であったように、彼が茶の湯を捨てたのは日本を去った時です。追放されるギリギリまで細川忠興は高山右近にお菓子を送り、お茶を送っていたと思うのですよ。そのお礼状がこの「日本訣別の書」の軸ですから。僕たちの日常茶飯事の中で、失われているものは何か、取り戻すべきものは何かというと、「静寂」って最後の言葉は極めて行かなければならない修道かもしれないですね。だから孤独を愛しましょうよ。人にけなされることにも耐えられるパーソナリティが欲しいなあ、それが侘びだと思えます。けなしている人の心を理解して、その人を祝福することのできる心だと思います。今を大切に自分自身を愛して、たった一人の自分を楽しむことが一畳半の茶室ですね。茶の湯とは分からないもので難しいものです。

高橋先生が丘の上記念会堂を造られた心、今でも脈々と続く激しくも静かな魂の叫びを伺った思いがしました。